

物とともに教えることと学ぶこと

企画者 楠見 友輔（立教大学／日本学術振興会特別研究員 PD）
話題提供者 市川友佳子（東京藝術大学大学院音楽研究科）
菱 真衣（東京都立青峰学園）
松本健太郎（東京都立多摩桜の丘学園/認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン）
楠見友輔（立教大学／日本学術振興会特別研究員 PD）
KEY WORDS: 授業研究 物の主体性 ニュー・マテリアリズム

【企画趣旨】

本シンポジウムでは、ニュー・マテリアリズム（以下、NM）の発想を取り入れて、物を人間とともに出来事を生じさせる主体と捉えた時に、教育実践と教育研究がどのように見直されるかについて議論を行う。

伝統的に、物は受動的で、人間が行為する手段として用いることでのみ動くと考えられてきた（Coole, 2010）。人間と物の主従関係は、心身二元論にみられる物と人間の区別に基づいている（Bennet, 2010）。つまり、人間には外部からの刺激がなくても行為を生じさせる主体性（agency）があるが、物は因果的に運動するのみだという区別である。人間が物を道具として使用するという見方は、発達という概念と深く結びついている。人間は成長とともに物や言語を操作する力を高める。ここから、発達を物や言語を有能に操作するようになる過程とみる見方が生じる。

しかし、物と人間の区別は、意思の有無や強さによって存在を序列化するという倫理的問題を生じさせる。発達は、理性的な人間を目指す変化と見なされ（Braidotti, 2013）、そこから外れることが逸脱とみなされる。これに対し、レンズタグチ（2010）は、子どもを理性的な人間に近づけようとする教育を「ロゴス中心主義」と呼び、それが人間の多様な変化の可能性を制限していると批判している。

NM では、人間だけではなく物も主体と考える。つまり、物を道具と捉えるのではなく、物にも予想外の出来事を生じさせる主体性があると考える。物を主体と見ると、授業、教授、学習の捉え方はどのように変わるか。教育研究は、人間の言語的相互行為に注目して教授と学習を分析する傾向にある。顔みや挙手のような非言語的な行為も、コミュニケーション上意味があるものは言語のように扱われてきたが、教室の中に存在するその他の様々な物が授業を構成する主体として扱われることは殆どなかった。これに対して教育研究に NM の視点を取り入れることは、教室内の様々な物や、物の様々な性質の能動的な影響を加味して、授業をより複雑で動的に捉える可能性を有している。

本シンポジウムでは、物として、教材、ICT、実体のない物の3つに注目する。これらを道具ではなく、人間とともに授業を作る主体と捉えたときに、どのような授業実践や授業の理解が可能になるかについて検討する。

【話題提供の趣旨】

1. 教材からの「発信」について（担当：松本健太郎）

子どもが夢中になる教材には、思わず手を伸ばしたくなるような「発信」があると言われる。今回は、実践知をもとに「発信」の正体を明らかにしながら、教材が主体性を発揮し子どもの主体性と支援者の支えと交わりながら豊かなやり取りが成立する条件について考察する。また、具体物に働きかけながら、イメージや概念を形成していく学習過程で支援者はどのように教材を準備して、子どもとやり取りし、その結果、子どもの変化をどのような視点で捉え

ているのか、事例報告を通して健常児の発達観といわれるものに依拠しない学びの在り方や支え方の可能性についてフロアともに考えたい。

2. ICTと「もの」に焦点を当てた授業改善（担当：菱真衣）

話題提供者は、東京都青梅市にある肢体不自由教育部門（小学部、中学部、高等部普通科）と知的障害教育部門（高等部就業技術科）の二部門を併置した特別支援学校に勤務している。GIGA スクール構想により、1人1台のタブレット端末や高速ネットワーク回線が整備され、ICTを活用した授業を推進している。そこで、子供たちの「もの」に対する思わぬ反応に焦点を当てて授業改善を行っていき、ICTと従来からある教材の利活用が見えてくる。手順を説明しなくとも、「もの」が活動方法を示してくれた事例から、「こんなふうに操作したくなる」情報デザインについて話題提供する。

3. 目に見えない物から学ぶ（担当：市川友佳子）

音楽科において音楽を通して何か「できるようになる」「分かるようになる」ことだけが学びなのだろうか。目に見えない物（音・音楽）を主体と捉えようと、教師が教え、子どもが学ぶという型だけではなく、教師と子どもが共に学ぶ、もしくは学び合う型が見えてくる。言葉で学ぶのではない子どもが音・音楽を聴き、音の世界に浸った時どのような変容を見せるのか。そこには私たちの考える「音を聴く」以上の、言葉を越えた学びの姿があり、その姿を目の当たりにした教師の学びも存在する。そこに音楽科の新たな学びの可能性を見出すことができるのではないだろうか。事例を紹介しながら検討したいと考える。

【質疑応答の趣旨】

本シンポジウムは、物の主体性に注目することによって、教育実践を新しい視点からオープンエンドに考えることを目的とする。フロアの参加者にも、物を道具ではなく主体と見たときに、自身の実践や研究の見方がどのように変わり得るかを問いたい。なお、参加される方は楠見友輔（2021）「ニュー・マテリアリズムによる教育研究の可能性：物と人間の関係に焦点を当てて」『教育方法学研究』第46巻 pp.25-36. (doi.org/10.18971/nasemjournal.46.0_25)をお読み頂くことを推奨する。

【倫理的配慮】

発表において使用する事例に含まれる協力者に対して、以下の4点を説明し、本人または保護者から同意を得た。
①授業の事例は学会発表のみで使用し、それ以外の目的では一切使用しない。
②データの管理には細心の注意を払う。
③学会発表で事例の写真や動画を使用する際には、個人が特定されないように処理を行う。
④データの複製が行われないようにする。

(KUSUMI Yusuke, ICHIKAWA Yukako, HISHI Mai, MATSUMOTO Kentaro)